

投能力向上をめざした教材開発

～小学5年生に着目して～

堀江 将司 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 谷川 尚己

キーワード：投能力向上，リサイクルスロー，パラグライダー

1. 緒言

投の運動能力を測る一つの指標である新体力テストのソフトボール投げの平均値は、低下傾向が続いている。投能力の低下は、投げる要素を含むボールゲーム・ボール運動の領域で、その運動の特性を十分に味わえないことにつながってくる。そのためにも、「投運動」自体の習得を目的とした効果的な教材の開発が必要であると考えた。

そこで本研究では、投能力向上のために筆者が開発した下位教材の有効性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

米原市立I 小学校の5年生17名(男6名 女11名)を研究対象とし、下位教材である「リサイクルスロー」「パラグライダー」を実施した。なお、投能力の測定は投動作の観察的評価基準表と遠投距離から検討した。データ処理については、SPSS 19 for windows を用い対応のあるt検定を行った。また、遠投距離と投球フォームについての相関関係をみた。

3. 結果と考察

1) 下位教材における得点の変容

下位教材実施前後において、「リサイクルスロー」「パラグライダー」ともに回を重ねるごとに向上し、有意差が認められた。

2) 遠投距離と投球フォーム

下位教材実施前後の遠投距離については、21.8m から 24.0m と向上し、 $t=-3.07^{**}$ と有意差が認められた。投球フォームについては、19.2 から 22.8 へと得点が向上し、 $t=-7.63^{***}$ と有意差が認められた。また、遠投距離と投球

フォームにおいては、正の相関関係 ($r=0.96$)が見られた。

3) 各ポイント別の投球フォーム

「投げ手腕」「体幹後傾」「足の踏み出し」「投げ手反対腕」から有意差が認められた。これらを改善すると、投能力向上が期待できる。しかし、「フォロースルー」「体重移動」「体幹回転」から有意差は認められなかった。(図1)

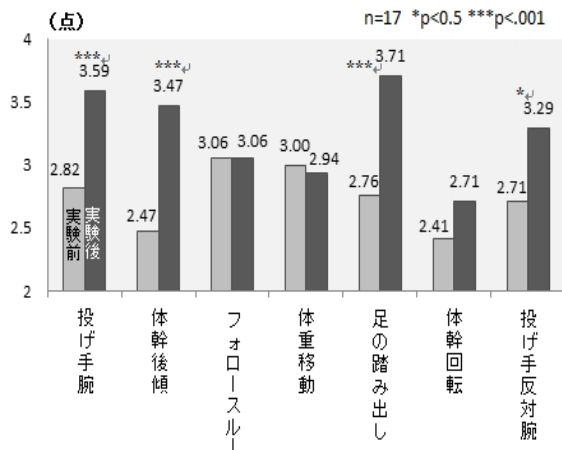


図1：投球フォーム前後における平均値の比較

4. 結論

本研究では、下位教材を実施することによって投能力が向上することが明らかになった。また、効果的な下位教材を提供し、投動作を生活の一部にすることが、重要な要素であることも示唆された。今後は、中学生・高校生の下位教材の有効性についても研究を継続していきたい。

【引用参考文献】

野口潤也 (2012) バンダナボールと落下傘ボールで投動作の習得を促す, 体育科教育, 60-6 大修館書店, 28-31